

今週のメニュー

[トピックス](#)

PVC News No. 73を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

[随想](#)

4095mの高みへ！

- キナバル山@マレーシア登頂記 - (最終回)

日本ビニル工業会 ストレッチフィルム部会 山本 達雄

[編集後記](#)

トピックス

PVC News No. 73を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

6月14日に塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）は[PVC News No.73](#)を発行しました。今号は「視点・有識者に聞く」のコーナーで「住宅リフォーム時代」への提言として東京大学大学院の清家准教授にご登場いただきました。

「インフォメーション」のコーナーでは長野県で進んでいる「無暖房な住宅」の最新の状況と今後の課題を紹介しました。

No. 73の構成は以下の通りです。

トップニュース

育てエコ・マインド！VECの小学生向け「環境出前授業」

視点・有識者に聞く

「住宅リフォーム時代」への提言

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 准教授 清家 剛 氏

リサイクルの現場から

(株)タイボー、「塩ビリサイクル35年」の変遷

インフォメーション1

「無暖房な住宅」をめざして - 開発の状況と今後の課題 -

インフォメーション2

「火災リスク」の低減と塩ビ製品の役割

塩ビ最前線

ファン急増！塩ビ製テントをファッションバッグにリサイクル

広報だより

「下水道展 '10名古屋」(7月27日～30日)に出展予定(塩化ビニル管・継手協会)

「建築・建材展2010」で、塩ビ建材の環境性能・耐久性をアピール(VEC)

掲載記事をいくつかご紹介いたします。

「トップニュース」はVECで行っている環境出前授業の紹介。

2009年の1月から2010年2月まで環境出前授業を始めてから、訪問した学校は28校、受講した生徒数は約2200人になりました。

「視点・有識者に聞く」のコーナーでは『住宅リフォーム時代への提言』と題し、東京大学大学院の清家准教授にCASBEEの作成に関わり、省エネ法改正に関わることになったこと、そして塩ビサッシリサイクルとの出会い、サッシのJIS制定に向けて原案作成委員会委員長を務められたことなどを語って頂きました。

「リサイクルの現場から」には12年前に紹介したタイボー社の、その後12年間の塩ビリサイクルの変遷を紹介しました。その中で平野社長は「塩ビ再生は30年間分離技術一本でやってきたようなもの」と独自の分離技術の開発によって現在も続けられていると述べています。そして産業構造審議会・中央環境審議会の検討会（プラスチック製容器包装に係る再商品化手法検討会）の委員なども務め、国の政策づくりにも積極的に参画するなど、リサイクルへ熱い思いを持っておられます。

「塩ビ最前線」では太陽工業（株）の塩ビのターポリンから一つしか出来ないオリジナルバッグ「MAKTANK」を紹介。太陽工業はこの6月に南アフリカで開催するFIFAワールドカップの3つのスタジアムの屋根を施工。中でもポートエリザベスの「ネルソンマンデラベイ・スタジアム」は京都にある工場で製造された膜製品を使用しています。（前号の[メルマガNo.274](#)には、子会社（バードエア社）の製品であるペースト塩ビ塗布の屋根材を使用した「グリーンポイント・スタジアム」をご紹介します。）

是非ご覧下さい。

『PVCニュース』はJPECのホームページから、最新号、バックナンバー共にご覧頂けます。

<http://www.pvc.or.jp/>

ご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

info@vec.gr.jp

随想

4095mの高みへ！

- キナバル山@マレーシア登頂記 - (最終回)

日本ビニル工業会 ストレッチフィルム部会 山本 達雄

- 五日目 キアウ村訪問とクリアス川ボートクルーズ -

出発に際し、ティンポホン登山ゲートに立ち寄り登頂証明書を発行してもらった後本日の目的地に向かう。

東マレーシアは、原住民と中華系人種が多数を占め、それに欧州人が若干生活している。原住民はいくつかの種族があるが、その中でドウスン族が約3割と最も多い。そのドウス

ン族の村キアウに向かう。コタ・キナバル空港を通り過ぎ南に車で3時間程度の山間部に位置する。途中道幅が狭くなったためバスを降り、軽トラックと乗用車に分乗して移動。村に入ると、牛や軍鶏が放し飼いにされている。村の中央部の高台にはキリスト教の教会があり、シスターや普及活動員と見られる若者たち10名程が歓談している。

安間博士は、十数年前国際協力事業団の事業でこの村等に入り、生活改善運動を勧めたことがあるという。ただ、野菜作りなどを勧めても、そのようなものを作らなくても食べていけるということでなかなか受け入れられなかったが、それを売れば現金収入になるということで実践されるようになったとか。

昼食はこの村の民家に案内される。陽気なご主人と家族に打ち揃って迎えられ、地元料理(ちまきのような物と果物など)と自家製の酒(ややすっぱかった)での歓待を受ける。家の中にはマリアさまの絵が飾られている。

ドゥスン族は、200年ほど前までは首狩族だったが、キリスト教の普及と共にその風習がなくなったとのこと。

キアウ村を出てしばらくいくと、道端にドリアンを売る屋台がある。折角の機会なので1個を買って皆で分けて食べる。程よく熟してねっとりとした歯ざわりと芳醇な香りは南国そのものだ。メンバーの中には匂いがだめと断るものが居たり、また、バスの中には持ち込まないようにと運転手に注意される一幕も。

やがて、バスはクリアス川に到着。ここで全員救命胴衣を身に着けボートクルーズに出発。鬱蒼としたジャングルの間の川幅100m程度の処を、何艘ものボートが行き交っている。やがて水先案内人が、右(左)前方の木を指差し、「オオトカゲ」、「テングザル」、「カニクイザル」、「カヌムリワシ」等(現地語をジェームズさんが翻訳)と叫ぶ、そこで我々は双眼鏡を向けて、「どこ・何処」といいながら探し、ボートはその際まで近寄り、ようようにその姿を視認できる。このようなことの繰り返しなので、何とか水先案内人より先に何か見つけられないかと探すのだが、全く話にならない。視力5-6のうえ周辺の生態系を熟知している人達に対抗できるわけがない。

あっという間に2時間が過ぎ、出発地点のボートハウスに戻り夕食。



キアウ村での歓談風景



テングザル



キアウ村の花

夕食が終わるころ辺りはすっかり夕闇に閉ざされ、そこで再びボートクルーズに。20分ほどいったところで、右前方の木に電飾かと思うほど、ピカピカ小さな明かりが一面に瞬いている。ホタルの群生だ。この瞬きは繁殖期の夕刻に見られるが30 - 40分程度で終わってしまうとのこと。

ボートクルーズが終わり、バスで2時間ほど戻りコタ・キナバルのホテルにて宿泊。

- 六日目 市内見学後帰路に -

いよいよツアー最終日。キナバル市内を安間博士の案内で観光。魚市場は一般の人が自由に入り売買することが可能。それぞれのテーブル上に活きの良い魚が山のように並べられて、売り子たちの威勢のよい声が飛び交っている。この魚市場の活況にマレーシア経済の底力が垣間見られた。

さらにマーケットで土産などを買い帰路につく。なお、帰りの便は、クアラ・ルンプール経由にて翌朝成田着。

極めて充実した7日間であった。

なお、この報告書の図・写真はオオウツボカズラの写真を除き自然と共に生きる会会員の豊留勉氏が作成、撮影したものを使用させていただいています。



魚市場にて

ここで、自然と共に生きる会（JISEI）の紹介をさせていただく。JISEIは30年前、化学工業日報の記者であった高井征一郎氏によって設立され、「素晴らしい仲間と、素晴らしい自然を体験しよう」、「人の心を豊かにし、健康を増進する活動に参加しよう」、「自然との調和に基礎を置く、新しい文明を築こう」をモットーに山歩き、自然観察（植物観察・バードウォッチング・地質観察・キノコ観察など）、ウォーキング（名所旧跡ウォーク、これまで東海自然歩道を完歩し、引き続き関東ふれあいの道を年3回ずつこれまで17回目に達し現在栃木を歩いている。世界自然遺産を巡るウォーク、2日間で100kmのウォーキング）及び自然生活（寒中水泳、山菜教室、東京都檜原村に自力で建てた茅葺小屋をフィールドとした炭焼き・ソバ打ち・味噌作り・燻製作り等々）などの活動を実践している。また、会報「四季の集い」を隔月に発行している。

現在の会員数は130名ほどで、月に3～4回開催される会の催しには自分の好みや体力、体調、などを勘案しながら自由に参加できる。会費は年間5千円。

なお、本年創立30周年を記念して記念誌「自然と共に生きる会30年のあゆみ」を発行した。（了）

JISEIホームページ：<http://homepage2.nifty.com/jisei>

前回の「4095mの高みへ！ - キナバル山@マレーシア登頂記 - （その3）」は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/269/mag_269.pdf

編集後記

卒業して初めて、大学のクラブのOB会を開催しました。突然の訃報に寄せられた縁で、そろそろ集まろうとの話から幹事役を引き受けたのです。当日改札口で集合し、久しぶりの校内を散策しました。学園紛争激しいときに在籍していたメンバーで、その頃の思い出がよぎりました。団交の真っ只中に文化人類学の川喜多先生が真正面から向き合っていたことが印象に残っています。昔に比べて建物が混雑している中であって、イチョウや桜の木が大きく枝を広げて構えている姿にホットする思いでした。同じ場所で学んだあの頃の思いを情熱に変えて、閉塞しているこの時代を先頭に立って切り開いて欲しいと願っています。(円行)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp
